

2025 年度学校推薦型選抜試験

小論文

注意事項

- 1 小論文の問題冊子には、課題と下書き用紙がある。白紙・空白の部分は下書きに使用してよい。
- 2 別に解答用紙 1 枚があり、解答はすべてこの解答用紙の指定欄に記入すること。指定欄以外への記入はすべて無効である。
- 3 **解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。氏名を記入してはならない。**なお、記入した受験番号が誤っている場合や無記入の場合は、**小論文の試験が無効となる。**
- 4 試験終了時には、問題冊子の上に解答用紙を裏返して置くこと。解答用紙の回収後は監督者の指示に従うこと。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

課題

以下の文を読み、問題に答えなさい。

自分を客観的に見るのは悪いことではない。しかし、それがいつも誰かとの比較であったり、合格ラインからの距離としてしか意識されていないとしたら、ひたすら後ろ向きのそんな自己規定は、自らの可能性をあらかじめ封印無化するという点で害にこそなれ、益するところは何もない。

客観的な基準を欠いては評価そのものが成立しないから、ある一つの均一の断面で誰をも切り取るうとするのが評価の視線であり、きわめて限定的なある断面に投射された影が評価という数字に変換される。つまり評価というものは、原理的に、みんなに同じ物差しをあてて判断できる項目についてしか、測ることができないのである。一篇の詩を読んで、そこにどのような豊かなイメージを膨らませることができるか、そんな問題は評価の場では絶対に出ない。客観的评价が不可能だからである。

評価できる能力というのは、誰が採点しても同じ結果が出てくるような対象に対してだけ、それを量ることができるのであり、それがその人間の評価の全体像では決してないことは言うまでもないだろう。むしろ、試験などによる評価は、その人間のもっとも大切な部分については、もともと歯が立たないものなのである。

さらに、試験を含めたすべての評価は、〈現在および近過去〉だけを評価するものであり、それ以上のものではないということもいま一度確認しておきたいところだ。評価とは、常に〈現在の〉、しかもある側面だけに焦点をあてたきわめて限定的なものである。

ところが、その限定的な評価が一人歩きを始めると、あたかも個人の全体であるかのようなオーラを持ち始める。さらに、その限定的な〈現在の〉評価が、そのまま未来へ投射され、未来を規定する大きな要因となりやすい。未来は現在に依存はするが、地続きではない。現在が未来を規定し、限定することがあるとしたら、その要因は、自分の力はこれくらいのもんだからという萎縮した自己規定以外のものではない。

評価というものは、それが良ければ自信をもってさらに励み、悪ければ、それを分析して克服できるように対策を練る、そういう使われ方をした場合にのみ意味を持つ。ところが、評価そのものが自己目的化してしまい、評価を生かすのではなく、それに縛られてしまうという場合のほうが圧倒的に多いのが現実である。

永田和宏著『知の体力』2018年、新潮新書より抜粋

問題 筆者が述べていることについて、あなたの考えを400字以内で書きなさい。

下書き用紙

(下の矢印から横書きではじめること。)

	1					5														20
➡																				
5																				
10																				
15																				
20																				

(20×20)

(400 字)